

第8回 日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム 「家庭内ワンヘルスの取組み —人と動物における 薬剤耐性 (AMR) の実態と課題—」開催される

平成30年11月16日(金)、日本医師会と日本獣医師会の共同主催による第8回 日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム「家庭内ワンヘルスの取組み—人と動物における薬剤耐性 (AMR) の実態と課題—」が、日本医師会館大講堂において、厚生労働省、農林水産省の後援のもと、多数の参加者を得て盛大に開催された。

まず日本医師会から、横倉義武会長の代理として釜沼敏常任理事から挨拶代読があり、続いて日本獣医師会から藏内勇夫会長の挨拶があった。

【日本医師会 横倉義武会長挨拶(釜沼常任理事代読)】



日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム「家庭内ワンヘルスの取組み—人と動物における薬剤耐性 (AMR) の実態と課題—」の開催に当たり、日本医師会を代表してご挨拶を申し上げます。

皆さま方におかれましては、日頃より感染症予防や薬剤耐性対策等多岐にわたりご尽力をいただいております。衷心より感謝と敬意を表する次第です。

さて、本日のシンポジウムは薬剤耐性 (AMR) をテーマに取り上げました。ご高承のとおり、近年薬剤耐性菌が世界的に増加し、その一方で新たな抗菌薬の開発が減少傾向にあることから、AMR対策は国際社会における大きな課題となっております。

AMR対策につきましては、国も「AMR対策アクションプラン2016-2020」を策定し、医療機関における抗微生物薬使用量などについて2020年までの目標値を掲げさまざまな取組みを行っているところであります。

しかし最新のAMR動向調査によりますと、2017年の経口抗菌薬の使用量は2013年と比較して減少傾向にあるものの、2020年の目標値を達成するためにさらなるAMR対策の普及が必要であるとしております。

一方、日本医師会におきましては、One Healthアプローチの概念のもと、2013年11月に日本獣医師会との間で学術協力の推進のための協定書を締結し、一体的な

感染症対策等の実施に取り組んできたところであります。

2016年11月に福岡県で開催した「第2回 世界獣医師会-世界医師会“One Health”に関する国際会議」で取りまとめられました「福岡宣言」におきましては、医師と獣医師は抗菌剤の責任ある使用のため、協力関係を強化することが盛り込まれ、具体的な取組みが求められているところであります。

2017年6月には、厚生労働省が「抗微生物薬適正使用の手引き」を公表しました。この手引きは医師が適正な診断に基づく抗微生物薬の処方あり方について、振り返る契機となるとともに、さらなる抗微生物薬の適切な処方・使用に資するものとなることが期待されますが、単に手引きの活用を促すだけでなく、こうしたシンポジウムを通じて、医師、獣医師に対しAMR対策の必要性への理解を深めていくことも、われわれに課せられた使命だと考えております。AMR対策は、今後の活動の大きなテーマとして、大変重要であると認識しており、関係者のさらなる連携の下、実効ある取組みを進めてまいりたい所存です。

本日は6名の先生方にご講演をいただき、その後、総合討論も予定しておりますが、本日ご参加の皆さま方にとりまして本シンポジウムが実りあるものとなりますことを祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

【日本獣医師会 藏内勇夫会長挨拶】



本日、第8回の日本医師会・日本獣医師会連携シンポジウム「家庭内ワンヘルスの取組み」が、多数の皆さまの参加を得て開催されることに対し、日本獣医師会を代表して心から感謝申し上げます。

近年、国境を超えた広範な地域で人と動物の共通感染症の感染拡大が懸念される中で、人と動物の健康及び環境の保全に係る関係者が連携し、感染症及び薬剤耐性 (AMR) 対策等の課題に取り組むべきであるとする“One Health”の考え方が世界的に広がっています。

日本獣医師会では、以前から“One Health”の考え方に注目し、平成25年11月に、日本医師会との間で、“One Health”に基づく学術協力の推進に関する協定書を取り交わしました。

さらに、平成28年11月には世界獣医師会、世界医師会、日本医師会と本会が主催して、「第2回 WVA-WMA “One Health”に関する国際会議」を福岡県北九州市で開催いたしました。会議におきましては、その後の“One Health”推進の礎となる福岡宣言が採択されました。福岡宣言においては、“One Health”に係る具体的な課題として、人と動物の共通感染症の予防、薬剤耐性対策、医学・獣医学教育の改善等について、医師と獣医師が連携・協力して取り組むことが必要とされております。

日本医師会と日本獣医師会は、これまで“One Health”に関連するテーマを取り上げた連携シンポジウムを開催し、医師と獣医師の情報共有の場を設けてまいりました。今回で第8回となります連携シンポジウムでは、福岡宣言の重要課題の一つである薬剤耐性対策を取り上げ、これまであまり議論されなかった家庭内での人と飼育動物の薬剤耐性について情報交換が行われます。

医療分野からは、東邦大学の石井先生、国際医療福祉大学の遠藤先生、札幌医科大学の佐藤先生にご講演いただきます。また、獣医療分野からは、千葉県獣医師会の村田先生、動物医薬品検査所の川西先生、酪農学園大学の白井先生にご講演いただきます。座長は東北大学の賀来先生と酪農学園大学の田村先生にお願いをいたしました。人と家庭動物における薬剤耐性の課題について、それぞれの立場を代表する先生方にご出席いただくことができ、ご講演とご討論を楽しみにいたしております。

日本獣医師会といたしましては、わが国における“One Health”の推進が、人と動物が安心して共生できる社会の構築につながることを心から期待するものであります。

11月30日には、私ども日本獣医師会が創立70周年を迎え、記念式典と記念講演を開催することとしております。この記念講演では、特別講演として横倉義武 前世界医師会会長に、感染症とOne Healthに関するご講演をいただくことにしております。この場をお借りして、改めて横倉会長はじめ日本医師会の先生方に厚く御礼を申し上げます。

最後に、本日ご来場の皆さまに改めて厚くお礼申し上げますとともに、シンポジウムの開催にご協力いただいた日本医師会の横倉会長、釜薙常任理事をはじめ、関係者の皆さま方に心から感謝申し上げます。このシンポジウムがわが国における人と家庭動物の薬剤耐性対策を推進する契機になりますことを期待いたしまして、私の挨拶といたします。

【講演】

講演では、賀来満夫 東北大学教授と田村 豊 酪農学園大学教授が座長となりシンポジウムが進められた。

はじめに、石井良和 東邦大学医学部教授から「人から分離されるキノロン耐性菌の現状」について、特にフルオロキノロン系薬に焦点を当て、耐性菌の占める割合と保有する耐性因子の現状について説明が行われるとともに、フルオロキノロン系薬の使用による耐性菌の抑制についての講演が行われた。

次に、遠藤史郎 国際医療福祉大学塩谷病院教授から「医療における基質特異性拡張型β-ラクタマーゼ産生菌の現状」として、β-ラクタム系抗菌薬を加水分解し抗菌力を失活させる酵素であるβ-ラクタマーゼについて、その特徴等これまでの研究結果についての講演が行われた。

続いて、佐藤豊孝 札幌医科大学医学部准教授から「医療で重要なペット由来薬剤耐性大腸菌」について、伴侶動物由来薬剤耐性菌とヒト医療において分離される薬剤耐性菌との比較及び伴侶動物由来耐性菌が人の健康に影響を及ぼす可能性について講演が行われた。

次に、村田佳輝 (公社)千葉県獣医師会副会長から「小動物臨床領域での耐性菌の現状」について、各種感染症における分離菌種及び薬剤感受性率についての報告及び薬剤耐性菌の減少に努めた試みについての講演が行われた。

続いて、川西路子 農林水産省動物医薬品検査所主任研究官から「薬剤耐性 (AMR) 対策アクションプランに基づくJVARM (Japanese Veterinary Antimicrobial Resistance Monitoring System) の強化について—愛玩 (伴侶) 動物のモニタリングの取組—」について、AMR対策アクションプランに基づくJVARMの強化の一つである愛玩 (伴侶) 動物のモニタリングの取組みについての講演が行われた。

最後に、白井 優 酪農学園大学獣医学群准教授から「動物から分離される *Clostridioides (Clostridium) difficile* の検出状況とヒトとの関連」として、治療が困難かつ年間約20,000人がその感染症により死亡しているとされる *C. difficile* について、これまでの調査・研究を元にした *C. difficile* の分布及び伝播の可能性についての講演が行われた。

各講演後には、各講演に対する質疑応答が行われた後、講演者6人をパネリストとしてパネルディスカッションが行われ、人・動物・環境におけるOne Healthでの動向調査が必要であり、医師と獣医師間における情報交換や医学領域と獣医学領域間の情報共有が求められ、一般市民向けにも正しく情報公開を行うことが重要であるとされた。

シンポジウムの最後に酒井健夫 日本獣医師会副会長

から、薬剤耐性（AMR）の対策については、医師と獣医師間の情報の共有化が重要とされ、さらに情報の発信が必要とされることから、今後は一般市民も含めてシン

ポジウムを開催していきたい旨が発言され、本シンポジウムを閉会した。



東邦大学医学部
石井良和教授



国際医療福祉大学塩谷病院
遠藤史郎教授



札幌医科大学医学部
佐藤豊孝助教



(公社)千葉県獣医師会
村田佳輝副会長



農林水産省動物医薬品検査所
川西路子主任研究官



酪農学園大学獣医学群
白井 優准教授



座長を務められた
東北大学
賀来満夫教授（左）、
酪農学園大学
田村 豊教授（右）



(公社)日本獣医師会
酒井健夫副会長による閉会挨拶